

相談者や協力者の性格や相談内容が悩み相談過程に与える影響

2080052 伊藤 菜穂

1. はじめに

私たちは何か悩みがある時、親しい友人や親などに相談することがある。悩み相談については、専門家や一般の人々がどのように人の悩みを聞くのかという点について検討が行われてきている(原田, 2003)。しかし、先行研究では、相談をする側(相談者)に焦点を当てた研究は少なく、また相談者や相談をされる側(協力者)の性格のタイプや課題の種類が悩み相談にどのような影響を与えるかについては検討されていない。

そこで本研究では、人の悩みを他者に相談する過程に着目し、相談の過程と性格のタイプや課題との関係について検討する。

2. 実験

実験計画

実験は、参加者の性格のタイプ(独立型・協調型)を参加者間要因とし、課題の種類(シェルター・プレゼント)と参加者内要因とする2×2の混合計画で実施した。

被験者

愛知教育大学の大学生56名(男性26名、女性30名)が実験に参加した。なお全ての参加者は、同性の友人2人ペアで実験に参加した。事前アンケートで分類したタイプによって、相談者-協力者のペアを独立-独立群(6ペア)、独立-協調群(6ペア)、協調-独立群(6ペア)、協調-協調群(10ペア)の4つに分類した。どの群の2人組も以下の2題に取り組んだ。

課題

相談内容として、架空の状況を想定したシェルター課題と、現実の状況を想定したプレゼント課題を実施した。

事前アンケート

高田・大本・清家(2000)によって作成された20項目からなっており、評定値を、あてはまる...5～あてはまらない...1と数値化し、奇数番号の平均と偶数番号の平均を比べ、奇数番号が高い場合を独立型、偶数番号が高い場合を協調型とした。この尺度では自己観を、独自性を主張することが必

要だと考える相互独立的自己観と人間関係の一部になりきることが重要だと考える相互協調的自己観に分けることができる。

事後アンケート

どの群も条件が同じであったかを確認するための、問題の難易度やペアとの話しやすさについての質問、タイプによる違いを調べるための、満足度や貢献度についての質問から構成された。

手続き

実験はペアで取り組む相談課題を1人で取り組む事後アンケートから構成された。2題の相談課題は解答時間含めそれぞれ15分ずつであり、事後アンケート、教示等を含め、全体の所要時間は45分程度であった。

始めに、それぞれの立場の説明をし、相談者のみに課題の内容を提示した。2題の課題の順序はランダムに決めた。

解答後、解答用紙をすべて回収し、実験を終了とした。実験中の様子はすべてビデオカメラで記録した。

3. 結果と考察

答えの提案者、事後アンケート、発話タグについて分析を行い、立場や性格のタイプの違い、相談内容が悩み相談の過程に与えた影響について考察し、悩み相談の特徴について考察した。

表1は、事後アンケートの質問や発話タグごとに、実験参加者の平均を示している。まず、立場や性格のタイプ、またその関連性について考察する。発話タグ分析の結果、否定は協力者よりも相談者のほうが割合が高く、相手の発言に対する反応は相談者よりも協力者のほうが割合が高かったことがわかった。それは、立場が違うことで、決定権の有無や持っている情報量に差があるからだと考えられる。つまり、悩み相談というのは立場の役割の違いが答えを左右する発言や、状況把握の発言の割合を増やすのに影響を与えていると考えられる。また、タイプの違いは、肯定と解決に向けた発言タグで差が見られた。さらに、答えの提案者ごとに見てみると、相談者の場合のみタイプの差が見られ、独立型のほうが決定している人

表 1: 実験参加者の平均

課題 立場 自分 相手	シェルター								プレゼント							
	相談者				協力者				相談者				協力者			
	独立		協調		独立		協調		独立		協調		独立		協調	
質問 1	<u>3.33</u>	<u>2.83</u>	<u>3.33</u>	<u>2.90</u>	<u>3.33</u>	<u>3.33</u>	<u>2.83</u>	<u>2.90</u>	<u>2.50</u>	<u>2.50</u>	<u>2.33</u>	<u>2.80</u>	<u>2.50</u>	<u>3.00</u>	<u>2.50</u>	<u>2.50</u>
質問 2	<u>2.00</u>	<u>2.00</u>	<u>1.83</u>	<u>1.60</u>	<u>1.83</u>	<u>1.83</u>	<u>1.83</u>	<u>1.70</u>	<u>1.17</u>	<u>1.33</u>	<u>1.00</u>	<u>1.70</u>	<u>1.33</u>	<u>1.33</u>	<u>1.50</u>	<u>1.60</u>
質問 3	<u>3.33</u>	<u>3.33</u>	<u>3.50</u>	<u>3.40</u>	<u>2.50</u>	<u>3.33</u>	<u>3.33</u>	<u>3.10</u>	<u>3.50</u>	<u>2.67</u>	<u>2.83</u>	<u>3.30</u>	<u>2.67</u>	<u>3.00</u>	<u>3.33</u>	<u>3.20</u>
タグ 1	<u>0.09</u>	<u>0.13</u>	<u>0.15</u>	<u>0.10</u>	<u>0.21</u>	<u>0.12</u>	<u>0.20</u>	<u>0.17</u>	<u>0.11</u>	<u>0.12</u>	<u>0.11</u>	<u>0.12</u>	<u>0.31</u>	<u>0.15</u>	<u>0.22</u>	<u>0.16</u>
タグ 2	<u>0.08</u>	<u>0.09</u>	<u>0.12</u>	<u>0.19</u>	<u>0.18</u>	<u>0.16</u>	<u>0.16</u>	<u>0.11</u>	0.05	0.07	0.07	0.12	0.06	0.10	0.14	0.08
タグ 3	<u>0.01</u>	<u>0.01</u>	<u>0.02</u>	<u>0.02</u>	<u>0.01</u>	<u>0.00</u>	<u>0.00</u>	<u>0.00</u>	0.01	0.02	0.02	0.05	0.02	0.00	0.01	0.02
タグ 4	<u>0.06</u>	<u>0.19</u>	<u>0.11</u>	<u>0.14</u>	<u>0.13</u>	<u>0.08</u>	<u>0.10</u>	<u>0.14</u>	<u>0.03</u>	<u>0.07</u>	<u>0.06</u>	<u>0.07</u>	<u>0.08</u>	<u>0.10</u>	<u>0.13</u>	<u>0.17</u>
タグ 5	<u>0.15</u>	<u>0.12</u>	<u>0.07</u>	<u>0.09</u>	0.07	0.07	0.09	0.12	0.07	0.06	0.03	0.06	0.05	0.03	0.05	0.09

質問 1: 課題の難易度

質問 2: 類似経験の有無

質問 3: どの程度必要だったか(相談者)どの程度役に立てたか(協力者)

タグ 1: 相手の発言に対する反応

タグ 2: 肯定

タグ 3: 否定

タグ 4: 情報探索

タグ 5: 問題解決に向けた発言

—: 平均が高い

~: 平均が低い

が多かったことがわかった。ここから、独立型は自分の意見を基に解決に導こうとする姿勢がうかがえる。一方、協調型は相手の意見を積極的に認めていたと考えられる。しかし、協力者になるとタイプの違いは抑えられていた。そして、立場とタイプの関連性については、協力者は自分とは異なるタイプの相談者に対してのほうが役に立てたと感じていたことがわかった。相談者にとっては、協力者のタイプの影響は弱く、誰に相談しても満足できるが、協力者にとっては、自分とは異なったタイプの人との話し合いのほうが足りないものを補い合っとうまく話が進んでいくと感じていると考えられる。

次に、課題の種類が相談過程に与えた影響について考察する。プレゼントは、プレゼントする相手を協力者の知らない人に限定したため、相談者の問題として捉えやすいものであった。その結果、プレゼントの情報探索の発言で、協力者のほうが相談者よりも高くなったと考えられる。一方、シェルターには差が見られなかったため、シェルターは、2人に状況の認識の差があまりなく、2人の問題として捉えやすかったのだと考えられる。また、経験の有無によって課題の難易度に差が見られ、経験がないほうが難しいと感じることがわかった。経験がある場合、具体的な提案をしやすい問題解決に向けた発言を協力者もしやすい問題であった

ことから、プレゼント課題のほうでは、問題解決に向けた発言に差が見られなかったと考えられる。

最後に、悩み相談の特徴を考察する。悩み相談の特徴は、その問題構造や所在にあると考える。問題解決の責任や決定権が相談者側にしかなく、さらに状況が相談者側しか知らないという点が悩み相談と一般の問題解決との違いだと言える。また、もう一つの特徴は、立場の違いの影響が強いことだと考える。

4. おわりに

本研究は、悩み相談をタイプ別、立場別に考察し、それぞれの性質を考察した。本当の悩み相談を取り扱うことは難しく、従来の協同問題解決に近い形で行ったために、今後は、実際に相談したい人を募集するなどして、悩み相談に近づけるようにすることを課題として挙げる。

参考文献

- 原田 杏 (2003). 人はどのように他者の悩みをきくのか: グラウンデッド・セオリー・アプローチによる発言カテゴリーの生成. 『教育心理学研究』, 51 (1), 54-64.
- 高田 利武・大本 美千恵・清家 美紀 (2000). 相互独立的 - 相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成. 『奈良大学紀要』, 24.